

わたしの戦争体験

筑紫野市

和泉 忠雄

昭和17年のある日、南満州鉄道大石橋列車区の青年隊寮である昌平寮の一室に非番の連中が集まり、連日報道される戦果について話が弾んでいた。仏印進駐も終わり香港攻略、蘭印バレンバンに空挺部隊が降下、前後して英領マレー半島のシンガポールは2月に陥落していた。そのうちに誰がいったのか、大東亜共栄圏の構想の中で、「昭南発（シンガポール）東京行特別急行列車の一番列車に最初の乗務員として誰が乗るか？」という話になった。

シンガポールを発車した列車は、マレー半島を縦断し、タイ、仏印を経て中国に入り、山海関から奉山線・安奉線で満州国を抜け、朝鮮半島を釜山から海底トンネルで斉州島に上がり、更に下関に上がって東京へ向かう、という構想である。

「俺が乗る、いや俺が一番だ」とワイワイいいながら、あまりにでっかい話に皆が酔い、酒に酔い、大いに盛り上がった一夜であったが、これが夢から出た真で、2年後には軍隊にあって、自らの手でこの実現に向かって、在中国米軍戦闘機と連日、死闘を繰り返していようとは夢にも思わなかった。

我々は敗戦など全然知らなかった。米軍の中国大陸上陸に備えるため占領地区を放棄して上海地区に集結する反転作戦が始まったが、途中長沙で兵器返納という名の武装解除をしてやると敗戦の事実を知ったくらいだ。

捕虜収容所は揚子江沿いの湖口の寒村王村である。

—纏足を見る—

朝から部隊が騒がしい。出てみると屯長夫婦が喧嘩を始めたらしい。男女それぞれの集団となってお互いに相手の悪いことを主張している。夕刻になると他の者はいなくなったが、二人は終わらないようだ。8時頃就寝しても、妻君が裏山で大きな声で「我要死●」（私は死にたいよう）。喧しくて寝むれやしない。たまりかねて部屋に行き「王さんよ、何とかせんかい」といっても、頭抱えて「我的面子沒有」とても手に負えんという。「じゃ俺に任せるか」「ホウ、チュワル、頼む」という。それで丘に登って行き「判った、判った、王の野郎とんでもない奴だ。もう帰ろう」といっても、勢いづいて余計に大声で喚き出す。らちがあかんでひっ担いで丘を降りて「一晚寝れば直るだろう」と寝室に放りこんだ。

翌朝夫婦の話し声がするので様子を見てみようと入りかけた途端、「ホウ、チュワル不行呀」ひょいとみると椅子に腰掛け足を組み、右足の纏足を布巾で巻こうとしたところであった。中国婦人の纏足は夫以外には見せない。写真でみたことは有るが実物は初めてである。「之は大変なものをみた」慌てて飛び出したが昨夜の仲裁のお陰か、殴られもせず顔合せても二人共知らぬ顔で何のおとがめはなかった。流石大人の国である。

—魚には名前がついていた—

食事はお粥といっても箸ですくって御飯粒が2～3粒乗る程度、腹は始終減っている。話といえば食い物の話のみ、21年の正月がくるというのに、魚でも喰いたいなといい出す。幸い集落の池には大きな奴がいる。あれをやろうじゃないかと衆議一決。実行は古年次兵が蚊帳で掬って獲れた魚は明朝、集落民の起きた頃を見計らって、初年兵が担いで山の向うから帰ってくる。中国軍の支給に見せかけるという寸法だ。

8時頃食事していると、何時ものように集落民が集まってきた。帰ってきた糧秣受領者？達をみながら「今日は中国の大人から魚を沢山貰ったな」といいながら見ていたが、だんだん変な顔付になり雲行きがおかしくなった。1人2人と皆いなくなってしまった。「こりやおかしいぞ、ばれる訳がないのだが」と思っていたら、屯長から「ちょっと来てくれ」と呼び出しがあった。「お前は中国人同様だし、中国の事は何んでも知っているが、これだけは知らなかったな」と笑いながらいう。「あの魚は本当に中国軍から貰ってきたのか、あれは集落の魚だよ」という。ばれてしまっは仕方がない。

「正月で、知っての通り喰べるものもないので池の魚を貰った。申し訳ない。ところでどうして判ったんだい」と問えば

「あの魚をよくみてみろ、尾の上が切っているのは誰々の魚、尾の下が切っているのは誰のもの、エラの右は誰、左は誰」と皆目印が付いていると笑っている。いわれてふっと思い出した。ある日、2つの桶に梯子を括りつけた即席の筏の上で投網していた農夫が、一尾づつ眺めては舟の中に眺めては池の中に返しているのをみて、ある程度の大きさになる迄は獲ってはいけな集落の決まりがあるんだなとその時は思ったが、とんでもない間違いで自分の魚を確認していたのだ、と初めて気が付いた。

—中国残留を要請される—

2月のある日、王屯長から呼び出しがあった。「実は皆さんは桜の花を日本で見ることになるだろう、と中国の大人がいつている。その時になったら中国に残って日本の子供と同じように集落の子供を教育してくれないか。勿論身の安全は集落全員で守り中国兵には渡さない、また家、食糧は集落民で保証する」と学校の教師共々話があった。意外な申し入れに「自分は教職でなくその資格もない、適当な教師の者を紹介するのでそれに話してみてもいいか」と断わると、「他の者では駄目だ、お前でなければいけない」。何で俺にと考えていると、ははんあの師範学校の学生の所為だなと思った。昨年暮れ帰ってきた学生が英語の本をもってきて「お前等英語が判るか」という。読みながら「これはHORSE、家の意味だ」という。「オイオイ間違っているよ、家はHOUSEでHORSEは馬の意味だよ」といえば、「曖呀！間違えた」。そして不思議そうに日本人は英語が判るのかという。「英語ぐらい誰でも知っているよ。そこらの兵隊に聞いてみろ」。面目なくしたのか今度は数学の教科書を持ってきて、「これが解けるか」という。代数の二次式の因数分解を習っているようだ。「じゃこれが解けるか」と三次式を書いたら、未だ習っていないという。よっぽど東洋鬼の日本虜に負けるのが悔しかったのか、また家に引返して今度は硯と筆を持ってきた。「日本人は自来水筆（万年筆）

だから毛筆は使えないだろう」という。そこで「好人不當兵、好鐵不打釘（よい人は兵隊にならず、よい鐵は釘にならない）」と書いて、日本ではよい人が兵隊になるんだといたら黙り込んでしまった。人の好い王屯長夫妻、随分迷惑を掛けたが常に庇ってくれた。未だ健在か。長桂、木桂、福桂の3兄弟も60才の声を聞く頃だろう。素晴らしく頭のよい子供達だったが、よい指導者になっていることだろう。50年経っても思い出は尽きない。